



ほめる技術

6月5日の給食時に「新しい本が図書室に入ったので…」と放送が流れた。

では、少し借りていきますか、ということ

「月の立つ林で 青山美智子著」と「上手にほめる技術 齊藤孝著」を借りていった。

「月の立つ林で」は、切り絵のような表紙絵が綺麗だったのでなんとなく

「上手にほめる技術」は、齊藤先生の本を何冊か読んでいたから が主な理由。

「月の立つ林で」は、少し人生に生きづらさや家族に不満を感じている人たちの短編小説。

ポッドキャストから流れる「月」にまつわる話を聴き、前向きに生きようとする話？

娘を遠くへ嫁に出した家族の話では、お父さんに共感してしまい、ちょっとウルッと。

短編ではあるが、それぞれの話の登場人物が見事につながり、終盤の感動へと誘う。

作家の方たちは、どうしてこうも絶妙な文章を紡ぐことができるのかと感嘆する。

感動の余韻を持ちつつ「上手にほめる技術」へ。心に残った言葉をいくつか紹介します

- ・教育学の肝は、まさに「ほめ方」にある。
- ・人をほめるときにまず必要なのは、ほめどこを探そうという「意志」
次に大切なのは、どこをほめればいいのかを見付ける「観察力」
- ・ほめ言葉とは、人を伸ばす光であり水
- ・誰かをほめて、その人が気分をよくすれば、自分の気分もよくなる（セラピー効果）
- ・失敗や欠点もほめ、マイナスに見える部分にプラスを見出すことも大切 等々

日本人は、ほめることが苦手だから自己肯定感が低くなるとも。

ほめ方の例として四字熟語や「やまと言葉」を使った例があったが、ちょっと難しそう。

私が使うためには、その言葉が自分のものとなるまでもっと学ぶ必要がありそうだ。

さて、「褒める」と「認める」について、生徒指導リーフ18号に次のようにある。

大人が子供を「褒める」ときは、一般に大人の基準や水準で「褒める」ことが多い。

それに対して、子供が「認めてもらいたい」ときというのは、一般に子供の基準や水準で「褒められたい」のではないか。だから大人の基準に達していなくても「褒められたい」ときもある。

子供の実際の行動と向き合うことなく、表面的にお世辞をいっても子供は嬉しくないし、励みにもならない。子供自身に目標や工夫する点、努力する点を考えさせておき、どこまで達成できたのかを評価する「認める」ことが重要である。

的確に「認める」ためには、やはり一人一人をきちんと見るのが大切とある。

努力した点、頑張った点について、タイミングを逃さず「認め」「褒め」ていきましょう。

きっとその言葉が、子供たちの前向きに生きようとする力になっていくはずです。

「月に立つ林」の登場人物たちが、最後は前向きに人生を歩み出していくように。